「カリコボーズの村づくり」

宮崎県西米良村長　黒木　定藏　氏

はじめに

ただいま、ご紹介をいただきました、黒木でございます。今日は、九州各地から九州ブロック社会教育研究大会宮崎大会にお越しをいただきましたことを、まずは、県民の一人としてご歓迎を申し上げたいと存じます。そして、皆さん方が日頃から大変な看板のもとに、社会教育はもとより学社融合教育、そして地域の活性化や安全のためにご尽力を賜っておりますことに心からの敬意と感謝を申し上げたいと思います。本当にご苦労様でございます。

さて、今日は、光栄にも私のところにこのような場が与えられましたが、なかなか不慣れなことでございまして、また、今日の大会の趣旨に沿うのかどうかという気もしておりますが、与えられました時間、私どもが本当にちっぽけな村で取り組んでおります地域づくりについてお話をさせていただこうと思います。どうぞよろしくお願いします。

社会教育は、結局人づくりだと思います。地域づくりも人づくりだと私は思っています。人を磨き、そして地域を磨き上げていくその先に、やっぱり明日への希望が見えること、それが活性化という作用だろうとそういうふうに思います。その意味では、みんなが力を合わせながら、地域のことをしっかりと考える機会を作るということが、そういうグラウンドを作ることが一番必要だと思います。

先ほど紹介いただきましたが、私はちょうど４期目になります。平成 10 年に村長になりました。その前は、私は農協職員でございました。６月 30 日に辞めて、７月 30 日から役場の助役になりました。もうチンプンカンプンであります。何のことやら分からんということでありましたが、図らずもではございますが村長になりまして、早月日が流れました。生まれは 1948 年、当年とれば 54 歳でございます。お分かりいただいた方がパラパラといらっしゃるようですが、あと 10 か月もいたしますと前期高齢者の仲間入りでございます。そんなところで、私どもがいろいろと地域振興する中で、いろんなことにやっぱり突き当たります。やっぱり人の心、人の思い、すべてがそこに行き着くような気がいたします。そんなことを含めまして、これから私どもの村で、私どもが取り組んできましたことにつきまして、あんまり理屈を言ってもしょうがありません。画面を見ていただきながら、紹介をさせていただこうと存じます。

西米良村の紹介

まず、今日は現在の私たちの村の様子、それから課題、そしてどういうふうにして村おこしをしようかという、いわゆるステップ１、最初の段階、そして現在行っているステップ２、さらには私たちの課題やこれからの取組についてお話をさせていただこうと思います。

九州の、九州山地の真ん中なんです。96%が山なんです。これを聞いただけで、どんなところかお分かりいただけると思います。ここが過密になるはずがありません。ここにたくさん子どもができるわけがありません。でも、営々として営みが続いてきて、私たちは次の代に継がなければならない大きな使命と役割を負っている、そのことにチャレンジするのが村づくりだと思います。

私たちの村の沿革を少し申し上げます。明治

22 年に町村制ができました。この時に、江戸幕府の後で町村が決まったのです。ほとんど村なんですけれども、その時に西米良村ができました。この時に 3,957 名おったんです。今見てください。1,272 名ですから、明治の初年よりも人が減っているんです。これが現実でございます。もちろん東村というところと、２つに分かれたというところも影響しているわけでございます。

また、高齢化率が今 41.35%。100 人のうち 42 人が 65 歳以上でございます。若者が 100 人のうちに７人しかいないんです。問題は言わずと知れて、たくさんあるということになるだろうとはお感じいただけるだろうと思います。ただ、私たちの村は、これだけはすばらしいと思います。春夏秋冬、まさにどこの山を見てもこういう風に、春３月 20 日から４月の頭頃には、山の野に咲き、谷の底に匂う山桜の美しさは、昭和 16 年、あの日本史の大家平泉澄（ひらいずみ きよし）先生がお越しいただいた時と、まったく一緒であります。むしろ、一時、戦後山が荒廃しました。でも、今、山が豊かになってきましたから、また当時の姿に返っているのかなと思います。我が家の窓を開けても、目の前にある山に 100 本やそこらの桜は毎年きれいに同じように、時を同じくして咲いてくれる。そんな美しい自然には不足しないところでございます。

そんな私の村には、カリコボーズという精霊が住んでいます。カリコボーズは春のお彼岸のころに尾根伝いを降りてきて、ドボンと川に入ります。そして夏の間、川の恵み、幸を豊かにしてくれます。そして秋、ススキの穂が風に揺れるころに、また、尾根伝いをホイホイと鳴きながら、山に上がり、森を作り、山を守ってくれるのが森の精霊カリコボーズなんです。ただ、カリコボーズは少しいたずら好きで、人の真似をしたり後から着いてきたりするから、ちょっと怖がる人もいるんですが危害を加えたことはありません。そして、このカリコボーズは見える人がいるんです。小さな子どもとか、すごく年齢を重ねられたお年寄りの方に見えるそうです。心の美しい人には見えるそうです。どうぞ、みなさんもいつか我が村に来ていただいて、ぜひ試していただきたいと思います。もし、見えた人は、幸せになれるかもしれません。私は残念ながら 54 年間、チラッとも見たことはございません。清く、正しく、美しく生きているつもりでありますが、やっぱりつもりかなあと反省をいたすところであります。

熊本からお越しの方もいらっしゃると思いますが、私たちは熊本県の菊池市、もとの隈府の流れをくむ一党でございます。ですから殿様は、南北朝時代に菊池から私たちの村に落ちられたその子孫が多いわけでありますし、また、今日は町村会長も見えておりますが、壇ノ浦で敗れた平家、椎葉村にはたくさん入っておりますが、同じように私たちの村にも山を越えて入っております。ですから、ほとんど落人の村でございます。ただ、菊池が落ちる時に公家とともに入ったという説がございます。二十八間四方白星兜鉢が昭和２年に出ました。今、国立博物館にございます。それから、この宿神という面は、能面なんですが、室町の中期の作品と言われます。そんなものがもともとあるわけがございませんので、どなたかがやっぱりお越しになったということには間違いありません。

当時の文化を伝えるのに、神楽も 600 年の歴史を誇る神楽がございます。今だに 12 月になりますと、夜を通して奉納されるという習慣がしっかりと残っております。百済様式を色濃く残す、私たちの、この地方の神楽と言われております。ただ、私たちの村と言われてはおりますが、はっきりしたことを言わない理由は、書いたものがないのです。なぜなら、廃仏毀釈運動というものがありました。あの時に、お寺を全部つぶしてしまった。だからお寺がゼロなんです。みんな、二礼二拍手一礼で全部済むんで

す。日本でもあと一か所どこかにあるらしいですが、仏教の無い村というのも売りにならんのかなと思います。仏教がないんです。だから私たちは、いろんな交通安全の祈願祭とか、いろんな祈願祭をする時に、あんまり遠慮がいらないんです。みんな神道だけだからです。それでやったらいけないと言う人は誰もいないのです。そういう特殊な村で、お寺にはたいがい書き物とかあるんですが、それが全部つぶされたということもあるんですが、事実としてこういうものが残っていることも事実であります。

菊池一族が落ちたと言いました。菊池一族は大政奉還まで 1501 年からずっと米良の地を治めました。1501 年に菊池の地を追われた一団が、山を通って逃避行をして、我がこの米良の地に入られて、菊池という名前では追討されますから、米良岩見の守と名乗ってその地を領したということから始まっております。そして、大政奉還までは変わらないということは、その教え、教示、訓示、そういうものがずっと真っ直ぐ、一つの家ですから来ている、国替えになるとどうしてもお殿様は我が家の歴史を継ぎたい、そんな意味からしますと、私どもはこの菊池の精神、菊池の教えというのを、いわば金科玉条的に大切にしております。「須らく浩然の気を養い、須らく天下の魁と為るべし」、まさに、大地から湧き出るような勇気ややる気をもって、みんながスクラムを組みながら、一番先を駆けていこうではないか、先駆けとなろうではないか、そんなことが私たち地域の村の合言葉になっていることは極めて幸せなことだと思います。

（プレゼンを指しながら）日頃の風景はこういうところです。この風景も私たち西米良でも一軒になりました。ちょっと目につきにくい高いところですが、わら屋根、茅屋根もございません。たぶんどこも無いと思います。昭和 40 年頃まではあったんですが、それから一気に減ってしまいました。そして西米良だからある物というものがあります。これは、どこでもあるのですが、でも、熊本県の緑川の上流のアユと私ども米良地域のアユというのは、非常に薫り高くおいしいという定評をいただいております。ぜひ、太公望のみなさん来てください。夏の間はずっといますし、まだ網で捕っています。だいたい 25ｃｍから 30ｃｍ、腹いっぱいになったアユが今たくさん捕れています。これが私たちの「米良糸巻大根」という特徴のある大根です。糸が巻いているようにあって、西米良にしか無い大根です。特徴は、何だ、こんなへんてこなとお考えかもしれませんが、特徴はこの葉っぱ、小さい時に葉っぱ食べますね。ポルフェノールがすごくありますね。だから女性はたくさん食べると若返ると思います。若返るそうです。見たことはありません。この根っこ、だいたいもともと焼き畑で作るんです。山を切って燃やして、種をまいて、そうすると傾斜がありますから、糖度が出るんです。10 度くらい出ます。ふつう皆さんが食されている大根、青首大根、耐病総太り。農協だから詳しいんですよ。あれはですね、３度くらいです。これは 10 度くらいあります。そしてこれはキメがすごく細かい、煮くずれしません。すごく組織が細かいものですが、一つ一つの中に成分が全部入っているんですよ。だから、割って切って、お味噌とかにつけて食べる時は辛くなくておいしい。すりおろしたら滅茶辛い。面白いでしょう。そういう特徴のある大根があるんです。「伊勢イモ」というのがあります。お芋を３種類植えたら、私たちの村のお猿さんとイノシシさんは必ずこれから食べます。だから野生動物の奨励品種でございます。それから「柚子」もあるんです。この魚が、私の村にしかおりません。「西米良サーモン」といいます。いない理由。Ｆ１（交配種）だからです。エゾイワナと川マスをかけて作った、この人が作ったんです。川のお魚ってちょっと臭うじゃないですか。あれが全くありません。甘みがあってとってもお

いしい魚で、これが私たち村のメインになりつつあるかなと思っています。「ホオヅキ」もたくさん作っております。私の背より高くなります。20 個くらいなります。気候がすごく合ってるのかなとも思います。

そんな村なんですが、歴史的には 30 年代は木炭の生産で日本一だったんです。でも燃料改革があって、化石燃料にとってかわったとたんに、木炭がスタンと落ちました。今、生業としてやっている方はゼロです。だから木炭を焼く技術すら無くなりそうなところに来ておりまして、若い林業家たちが木炭の技術をお年寄りの方に習っているという現状であります。ほとんど焼肉する時は、東南アジアのマホガニー材を使っているという寂しい現状も一方ではあります。採算がなかなか取れないということが、その裏打ちだろうというふうに思います。その中で、いろいろ計画しました。「ワーキングホリデー」というのもしました。「ゆた～と」という温泉も開業しました。13 年頃からまた作って、いわゆる自立自走の村づくり、もっと元気を出そうとしました。19 年からの構想では、幸せ感を見出す桃源郷づくり、それに今取り組んでおります。そのことにつきまして、これから、またお話をさせていただこうと思っております。

桃源郷づくり

（将来人口予想グラフを見ながら）これなんですよ。日本全体が激減します。人間が減ります。だって合計特殊出生率、一人の女性が産む子どもの数が２を超さないんです。夫婦が 1.5 人とかしか産まなければ、減るのが当たり前。結婚年齢がやっぱり遅くなったのが原因だと言われますが、何とかしてこの対策をしたい。特に、私たちその渦中にあるものは、一生懸命考えました。その時、平成６年の予測では、平成 22 年に 748 人になると予測されました。よし、じゃあ何とかして対策を立てて、活気のある村づくりをしよう。いろんなことを考えました。さっき言いました菊池の薫陶があります。やっぱり人間元気であることが何よりもうれしい。カリコボーズの話をしましたが、カリコボーズが住めるような豊かな、心も自然も豊かな村づくりというのをコンセプトにしました。そして村民が一致をして、この村づくりに取り組みましょうという合言葉のもとにいろんなことを始めました。

最初に始めたのが、宝探しなんです。やっぱり地域のいいものをしっかりと見出す力を、私たちはつけなければならないと思います。それぞれの地域にあった特性のある力のあるものをどう見出すかが一つのポイントだと思います。もちろん自分たちが立場を変えていろんなものを探す、宝探しをする、でもそれだけではなかなかです。昔からよそ者、ばか者、若者と言われます。違う目で見ていただく、それは、やっぱりそのものを違う人が見て新しい価値を見出していただく。新しい価値を、方向を見出していただく。それから他との比較をやっぱり教えていただく。そんなものは私たちだけではできないと思いました。だからよそ者と言いますが、冷静な目をもった、やっぱり専門性の高い人、プロに磨いてもらうことも大切だと思います。それから、その素材を生かす力。すばらしいものがある。例えば先ほど大根の話をしましたが、大根はあってもじゃあどう売るの？その力はやっぱり自分たちの努力だけでも難しいと思います。やっぱりプロの力を借りる、マイナスをプラスに変える。1,200 人が 217k㎡におります。ポツンポツンしかいないことになります。でも逆に言えば、それだけ自然豊かだということです。一人当たりの面積が広いということなんです。例えば遠隔対称性が心理学にあると聞いています。遠くにあるものに価値を見出そうという心理なんです。「山のあなたの空遠く幸い住むと人の言う　嗚呼、我人と尋

め行きて　涙さしぐみ帰り来ぬ　　山のあなたの尚遠く　幸い住むと人の言う」ああ、山の向こうに幸せがあるんじゃなかろうか、虹の向こうにも幸せがあるんじゃなかろうか、ヨーロッパ文明は素晴らしい、でも、私たちはどうなんだろう。よその物がよく見える。桃源郷。そんな素晴らしい所がどこかにあるんだろうな。そんな心理を私たちのような所がうまく活用していくことも必要じゃないかなあと思います。

それから時代の流れ、時流に合わせる、ニーズを的確につかむということも大変大切だろうと思います。そんな考えのもとに始めましたのがこのワーキングホリデーであります。ワーキングホリデーはご存じかもしれません、昔、日本に大平総理大臣がいらっしゃいました。あー、うーとおっしゃってから話し始める、当時オーストラリアにブレザー首相という方が、背広みたいな名前の首相がおられましたが、その方との話し合いの中でやっぱり国際感覚を持った青少年を育てようということでワーキングホリデー制度というのを作ったんです。若者の交流に関する協定というのを結んで、旅行ビザで就労ができる、滞在して金を稼いでもいいと、普通は旅行ビザで滞在してお金を稼いだらいけないんですよ。お父さんが夜の街で、旅行に来ている外国の若い娘さんと飲んで喜んでおりますが、あれも違反がだいぶあるんです。そうじゃなくて、正式に法によって認められたワーキングホリデーというものの国内版をやったんです。いわゆる来る旅費は持っている人、文化の違う所でいろんなことを学びたいという意識がある人が来ていただく、そしてお金を払って体験を買っていただくというのがグリーンツーリズムですが、私たちのワーキングホリデーは、私たち地元が金を払ってその人たちのワークを買う。一週間あったら三日仕事をしていただいて代金を払います。そしたら後の２～３日は地域でゆっくり過ごしていただこうというシステムなんです。一週間ぐらいいる人が一番多いですね。一週間働いて、本当は全部働くんですよ、遊ぶ人はいないんです。一週間面白いんです。初めてのいろんな体験をすると楽しいんですね。そうしますと５日間仮に働きますと１日が 4,500 円ぐらいですから、２万円何某になります。施設に 3,000 円ぐらいで宿泊してもらいます。飲み食いは自分でしてもらいます。そうすると最後にいくらか金が残るんですが、土産をたくさん買って帰ってもらう。でも私たちの村には、その人たちがしてくれた仕事がしっかり残って、やっぱりじいちゃん、ばあちゃん、お父さん、お母さんたちの人手が足りないことが、そのことによって賄われるというシステムなんです。それと同時に働く場を作りました。今 43 名、第３セクターにはいます。一時第３セクターが赤字経営でボロクソに言われたことがたくさんあったと思います。今はほとんど言われないと思います。みんな知恵を使うんですよ。みんな努力をするんですよ。努力をして経営が成り立つようにされているんだと思います。私たちのところも、そういう中で第３セクターで若い人たちが 40 名ぐらい働いてくれております。

と同時に、「８つの庄づくり」というのを同時並行的にやりました。地域のみなさんが参加する、総参加するには一つ何かやって総参加というのはできないんです。私の村は８つの集落があります。８つの集落にそれぞれの特色がありますので、それぞれの集落にテーマ性をもたせていこう。中心はまちづくり。それから温泉は健康づくり、ダムあり湖あり湖遊びの庄、それから語り部、花作り、川遊び、匠、交流・滞在というようなことで、８つの庄づくりというのを同時並行で行いました。

ワーキングホリデーは、滞在が長いということなんです。観光は強いところに集中しますので、その周辺では来ておしっこして、強い所に帰る。というのが多く、滞在期間が短いんです。だから、いかにステイの期間を長くするかが、

私たちには必要なんです。お金が落ちなければダメなんです。お金を落としてもらうには、やっぱり滞在期間をどう伸ばすかということが大切なんです。そしたら、こういう体験をしていただきながら、長くする、ファンを作る、労働力のカバーということで、いわゆる西米良型のワーキングホリデーというのをやったところでございます。

その他にも、(プレゼンを見ながら)これは「山菜祭り」です。山菜というのは東北地方の人、寒い所の地方の人は、すごく山菜との絡み、触れ合いが深いんです。南九州になればなるほどあまり山菜なんかに触れることは少ないんじゃないかと思うんですが、少ないからこそ、うちでやろうと思ったんです。長野県の早川町というところが山菜祭りというのをやっています。早川町以西では多分ないんじゃないかと思いますが、本物の山から採れた山菜だけでやります。市場に行けば何でもそろいます、今は。全部そろいます。でもそれはやめて、実際山から採って、ほろ苦い、灰汁が強い、大きさはまちまち。でも、本物でやろうということにしています。

「山びこ花火大会」、96%が山ですから、考えてみてください。コダマするんじゃないんですよ。爆音がするんですよ。小さい子は、背中で震えて泣くんですよ。だから音の花火としては有名なんです。

それから、「百菜（歳）屋」、100 歳まで頑張れるように 100 の野菜を作って、みんなで楽しみましょうということで百菜屋。平均年齢 73 歳ぐらいのおばちゃんたちが毎日ここで頑張っております。それから越野尾という地区では、「桜祭り」をします。

それから、私どもの村では 150 ぐらいの「語り部」があります。語りというのは諭しであり、教えであります。そしてユーモアであります。そういうものの文化をしっかりと受け継ごうとして現在 40 人ぐらいの語り部がおりまして、お越しいただきました時には、ご披露させていただきながら皆さんに喜んでいただこうと努力をしています。

「ふるさと交流の会」というのは、曲り屋、遠野とです。実は、熊本県の菊池が本家と言いましたが、菊池が落ちる時にその子重為が、日向の米良山中に深く落ちたと同時に、熊野水軍で東北地方の、今回津波がありました釜石の方に入りまして、山を越えて遠野に入ります。遠野市は現在４万人ちょっとですが、その 8,000 名くらい菊池の姓の方がいらっしゃいます。その菊池市と遠野市と私の村とトライアングルで姉妹都市を結びながら、今交流をさせていただいているとこで、お互いに行き来をいたしております。

「ホオズキ」があります。一つホオズキ作ったら、それを売るだけじゃダメだと、東京にベジタブルアートをする先生が２人いらっしゃいます。野菜を使ってアートをする。その先生に来ていただきまして、そしてこのホオズキの自然の色、その中にライトをいれて明かすんです。そしたら、ホオズキのあの赤がバァーっと宙に出るんです。すごく素敵なんです。こういうアートもしていますが、それはいろんなものを作ります。その一つがクリスマス。12 月１日からは、温泉館の中で村民の数とカリコボーズの数で、１か月間展示をしております。また、これ以外に「コケ玉」ってのがありますが、植物を小さい玉にして、これも東京から家庭画報の先生をプロの方、できたら日本超一流の方ということにして呼んで勉強すると、もちろん隣近所にも詳しい人がいらっしゃるのですが、やっぱり日本一の方から習うと気持ちもずいぶん違うと思いますので、そういうことをやらせていただいております。

それから、「朝風呂会」ってのがあります。朝風呂会ってのは温泉の掃除です。以前は、温泉の掃除を職員でやっておりました。２時、３時までかかっちゃうんです。13 くらいありま

すから、その全部やるとそんなかかります。もう少し合理的にやる方法がないかと考えたときに、ある方から、昔江戸の町に朝風呂会があったと聞きました。江戸の町は、火事と喧嘩は江戸の華と言いますが、盗賊、泥棒も多かったんです。火付盗賊改め方長谷川平蔵ってのがおりますが、まさにそういう人がいるくらい火事が怖かったので、一般庶民の長屋の熊さん、八っつぁんには、お風呂が許されてなかったと聞きました。じゃあどこに行くか、銭湯。でも、金がないから熊さん、八っつぁんは「お掃除するから入れて頂戴。掃除やら薪割りやらいろいろするから。俺たちがみんなでこの銭湯を守ってあげる。でも、お風呂だけは入れてね。」っていうシステム、朝風呂会というのが江戸の時代にあったそうでございます。それを現在、お風呂に入るからというのはどうでもいいんでしょうが、村づくりに参加しましょう。特に、おじいちゃん、おばあちゃんは夜が白々と明ける頃にはパチッと目が覚めるようですから、6時半くらいはもうお茶の子さいさい。7時頃から来ていただいて1時間くらい掃除をしていただく。そうしましたら、若者が「じゃあ、俺たちもするわ」と、朝はダメだけど夜は任せてくれと。夜10時から若者が数名温泉館に行ってお掃除をします。朝風呂会と夕風呂会この2つのシステムで、私たちの村の温泉は15年間クレームをいただいておりません。お金にしますと年間にだいたい2,000万から2,500万はこれで助かっております。先ほど言いました、若い人たちが第三セクターで働いております。その人たちの支援にしっかりとなっているとそう思っております。おじいちゃん、おばあちゃんのお力で若者の支援をしていただくと、こんなにうれしいことはないとそう思っております。そのための文化活動、芸術祭もいたします。それを最近「月の神楽」というのも始めました。後ほどまたお話いたしたいと思います。

その他にも、定住と子育て（支援）をしなきゃダメだ。椎葉会長もおりますが、去年フランスに行って子育て支援を勉強してきました。もっとやらないといかんなとつくづく思いました。世界で子どもの数が増えている所があるんですよ。2を超しているんですよ、フランスは。どうしてだろう。すごい政策をたくさん打っています。それも行政が押し付けるんじゃないんです。民間団体の人たちがいろんなシステムを作って、行政に要求していくという形の中で、やっぱり子どもの数を増やすことに成功している。大変勉強になりました。

普通、若者が地元に帰ってくる時は、お家に帰りますよね。でも家に帰ってきたら、みなさんも年配者が多いからそうだと思いますが、息子やら娘やらを見ていると何かと言いたいでしょ。もう黙っておれと親父は言うけど、奥さんは小言ばっかり言います。まあ、人のこっちゃないんです、うちもそうなんです。黙っちゃおれないというのが実態でございまして。要するに近くにおればいいわけですから、中心地の村所ってとこがありまして、そこが少し家や町並みがありますので、そこに若者をみんな寄せちゃおうと考えたわけです。若い人たちは若い人でやっぱり楽しみたい。秘密も欲しい。余計なことを言われたくない。だから、「若者定住住宅」ってのを作りました。こっちは3部屋、こっちはシングルマンション。ただし独身だけで、結婚したら出てもらいます。でも、結婚してマイホーム作ったらお祝い金100万円。それから出会いの場もいろんなことで設けなければダメです。今は見合いというのがないから。ほとんど女性が結論を出しますから。男性群頑張れと言って支援してあげなきゃ、なかなか貰わず仕舞いが増えそうです。

青年あたりがせっかく帰ってきてくれましたので、この人たちの活動の支援を行っております。今月にも、全国青年大会にフットサル競技で行きます。自分たちも一生懸命寄附金取りをしてお金を集めておりますが、だいぶん足り

ないといいますから、それは支援することにします。

妊婦は、赤ちゃんができましたら、これは村の宝がそこに芽吹いたわけですから、宝として取り上げるまでは、しっかりと村で面倒を見ましょう。全部、検診やらを見ることに、もう10年前からしています。

次に、医療費。これも中学校までは全部村で見ます。小学生、中学生はですね、転んで手を折るくらいですよ。まあ特別な人、病気もっている人はいますが、普通の子どもは金はいりません。無料ですって大きいこと言っても、実際には、お金はあんまりいらんのですよ。まあ、風邪ひくくらいかな。ですから、やっぱり私たちにとりましては、小さな村の大切な子どもたちですから無料化します。子育て応援します。出産祝いもします。

そして、やっぱり私たちみたいな山ん中は、子どもたちが、本に親しむ機会が少ないんです。ですから、これは元給食車なんですが、給食車を改造しまして、1,000冊くらい本を積んで各公民館とか職場を回ります。毎月文の日の 23日にずーっと回って、本の貸し出しをするんです。それまでは、うちは図書館というものはなく、図書室があるんですけど、そこに年間2〜300 冊しか借りに来ることはなかったんですけど、今は2,000冊くらいを読んでいただいていて、あの人は本読むんだ。大変失礼ですけども、そう思うような人たちがたくさんいらっしゃることに気付かされたことは大変うれしいことであります。そして、今年は少しお金をかけまして、これの本格的な「移動図書館車」を買いました。雨の日も貸し出しができるように、2,000 冊くらいの本を積んでそれぞれのところを回って、本に親しむ機会を、チャンスを増やそうという読書運動も村民運動として立ち上げてるところです。

これは放課後子ども教室、それから修学旅行で、中学生が遠野に行ったところです。私たちの所でも雪が少しは降りますけども、あの滑って転ぶほども降りません。子どもは、大の字になって雪にバタァーと倒れてみたいそうです。スキーをやって大変喜んで帰ってきます。やっぱり初体験というのは何でも記憶に残るし、楽しんだと思います。

それから、私の村はさっきも言いましたように、とんでもない山ん中です。高校は、全部家を出て町の下宿か寮に入るんです。よく、宮崎市に出て行くんですが、宮崎市内の子どもだったら自分の家から通えばいいんです。でも、西米良だから、宮崎市にある部屋を借りて、子どもを住まわせて通学させなきゃいけない。食べたり、飲んだり、学習はみんな一緒ですよ。でも、部屋を借りる代金は、親の負担が大きいんです。だから、高校３年間は毎月一人３万ずつ補助をして、助成をして、子どもたちの教育を進めさせていただこう。兄ちゃんが大学、姉ちゃんは３年で今度受験。そして弟がまた高校となった時には、おい悪いけれどもおまえはね、ちょっと無理だからどっか違う学校に行ってくれん、なんてことが過去にはあったことは事実なんです。その子ども、その子どもの将来のために、子どもの能力を精一杯伸ばせるようにしてあげるのも私たちの責任ではないかなと思います。そんな考えから就学支援という意味でそういう助成もさせていただいているところであります。

まあ、そんないろいろな事がありまして、その結果748名が1,272名、目くそ鼻くその話かもしれませんが、私にとりましては大きいんです。合計特殊出生率も10年間平均で2.2とか３とかいうことで、２を大きく私の村は越えているのも事実でございます。ただし、凸凹が激しいんですよ。数が少ないから。これ見てください。それから、観光客の入り込みにつきましても、いろんなイベントとかいろんな仕掛けをさせていただきました。ちょうど平成10年、私はこの時に温泉ができたと同時に村長にな

りましたから、私が村長になったから上がったわけじゃない。温泉ができてたから上がったんだ。できて順調にいきました。と、こうきてストン、そしてストントンと落ちました。台風です。平成16, 17年ものすごい台風が来ました、続けて。あれで、ゴトンと落ちました。よし頑張るぞと言ったら、またストンと落ちました。口蹄疫です。そして去年はこうです。今年はこれに平行か少し上がってます。この口蹄疫は大変な被害を宮崎に与えました。とっても悲しい現象がたくさんありました。でも、今回長崎で全共（全国和牛能力共進会）がありました。宮崎県が９部門のうち５部門を取って優勝しました。これで、畜産王国宮崎、確かに頑張れるぞと、みんなの心にそんな気持ちが湧きましたし、口蹄疫とも一つここで踏ん切りをつけて、また新たな展開へ、新たな取組に行こうという気持ちに多分なってくるだろうなと期待しているところでもございます。

今まで言いましたことをずっとやってきたんです。そうしましたら、やっぱり少し方向を変えなきゃ、同じことばっかりでは飽きられるんです。私うなぎが大好きなんですが、宮崎県の西都市ってとこに、有名なうなぎ屋さんがあるんですよ。私は西都の農協にずっとおりましたが、１週間に３回食べてみてください、うなぎを。その次、うなぎ屋行こうと言われたらですね、もう何かムカッと来る気がします。自分の家でもそうでしょ。同じ物ばっかり食ってると大変。同じことなんです。飽きられずリピート率を上げるには、いろんなイベントだけじゃなく、やっぱりもう少し皆さんの心に響く、感動を、共感をいただくことをしなきゃいかんな、新しい村づくりを始めようと思って始めました。

19年から始めましたのが、「平成の桃源郷小川作小屋村づくり」というものであります。これは小川地区の田んぼからお城を見たところです。お城は新しいんです。これは10年位前でも、この石垣は江戸時代からそのままここに殿様のご隠居所があったのを利用してこういうことをいたしました。元気の創出をするにはどうするか、それから私たちの村には作小屋という独自の生活文化がある。そして生涯現役で住める村づくりを作ろうじゃないかということであります。そのキーワードを通して、私どもが考えました一つが桃源郷、これは陶淵明という人が書いた桃花源の詩「桃花源の記」から想像される一つの想像上の郷ですね。皆さんのお隣近くにある焼肉屋の桃源郷とは違いますので申し上げておきます。それから作小屋ってのがあります。大政奉還の折りにほとんどが官山、国有林にみんな納めたんですよ。でも、そんなことすると領民が、自分の家来が飯が食えねぇということになりますから、私どもの殿様が全部に分け与えました。そしたら、36ha 平均もらったんです。36ha 広いですよ。平地の36ha ならある程度ですが、山ですからね。だいたいそれのそうですね、50～60%増し。山は急ですから。それをもらいました。だから、住んでいるところから、山の仕事に行くのは大変なんです。それで若者は、お嫁さんもらって夫婦ができたら、じいちゃん、ばあちゃんは山に住むようになった。最初は、掘立小屋かもしれません。でも、そのうち水を引き、畑を開き、田んぼを開き、牛を飼い、今ではほとんどが隠居になってるというところで、まさにこの山中文化がずっと営まれた。それと、桃源郷を一緒にしちゃおうという発想で、この思いを強くするために、私も７泊８日で雲南省を全部歩かせてもらいました。確かに、今の中国とこの当時の中国とは違うんでしょうが、今の中国の奥地の方々も年間所得が５万円以下という方がたくさんいらっしゃって、それでも正にその浩然の気を燃やして生きてらっしゃる姿を見て、やっぱり桃源郷というものは、この人たちにとっても今でもあるんだとつくづくそう思いました。

桃花源の記（序文）から、

「晋の太元中、武陵の人、魚を捕ふるを業と為す。渓に縁りて行き、路の遠近を忘る。忽ち桃花の林に逢ふ。岸を夾むこと数百歩、中に雑樹無し。芳しき草は鮮やかに美しく、落ちる花びらは繽分たり。魚人、甚だ之を異とし、復た前に行きて、その林を窮めんと欲す。林は水源に尽き、便ち一山を得たり。山に小さな口有り。髣髴として光有るがごとし。便ち船を捨て、口より入る。初め極めて狭く、纔かに人を通じるのみ。復た行くこと数十歩、豁然と開朗す。土地平曠、屋舎儼然たり。良田美池桑竹の属有り。阡陌交わり通じ、鶏犬相聞こゆ。其の中に往来し種作する男女の衣著は、悉く外人の如し。黄髪垂髫、並びに怡然として自ら樂しめり。」

（訳例）晋の太元年間（376 年 - 396 年）、武陵（湖南省）に漁師の男がいた。ある日、山奥へ谷川に沿って船を漕いで遡ったとき、どこまで行ったか分からないくらい上流で、突如、桃の木だけが生え、桃の花が一面に咲き乱れる林が両岸に広がった。その香ばしさ、美しさ、花びらや花粉の舞い落ちる様に心を魅かれた男は、その源を探ろうとしてさらに桃の花の中を遡り、ついに水源に行き当たった。そこは山になっており、山腹に人が一人通り抜けられるだけの穴があったが、奥から光が見えたので男は穴の中に入っていった。

穴を抜けると、驚いたことに山の反対側は広い平野になっていたのだった。そこは立ち並ぶ農家も田畑も池も、桑畑もみな立派で美しいところだった。行き交う人々は外の世界の人と同じような衣服を着て、みな微笑みを絶やさず働いていた。

男を見た村人たちは驚き話しかけてきた。男が自分は武陵から来た漁師だというとみなびっくりして、家に迎え入れてたいそうなご馳走を振舞った。村人たちは男にあれこれと「外の世界」の事を尋ねた。そして村人たちが言うには、彼らは秦の時代の戦乱を避け、家族や村ごと逃げた末、この山奥の誰も来ない地を探し当て、以来そこを開拓した一方、決して外に出ず、当時の風俗のまま一切の外界との関わりを絶って暮らしているという。彼らは「今は誰の時代なのですか」と質問してきた。驚いたことに、ここの人たちは秦が滅んで漢ができたことすら知らなかったのだ。ましてやその後の三国時代の戦乱や晋のことも知らなかった。

数日間にわたって村の家々を回り、ごちそうされながら外の世界のあれこれ知る限りを話し、感嘆された男だったが、いよいよ自分の家に帰ることにして暇を告げた。村人たちは「ここのことはあまり外の世界では話さないでほしい」と言って男を見送った。穴から出た男は自分の船を見つけ、目印をつけながら川を下って家に戻り、村人を裏切ってこの話を役人に伝えた。役人は捜索隊を出し、目印に沿って川を遡らせたが、ついにあの村の入り口である水源も桃の林も見付けることはできなかった。その後多くの文人・学者らが行こうとしたが、誰もたどり着くことはできなかった。

桃源郷詩から、

桃源郷の人はみんな農耕に励む。日が沈むと家に帰り休み、豆やコーリャンは生えるべき時節に植えられていると。春の蚕から糸を取り、秋に収穫があっても税金もないと。草が生い茂った道は、はるかに先で交わっており、犬や鶏の声が聞こえる。祭礼も昔ながらのしきたりでやって、身なりも素朴で目新しいものがない。でも、子どもたちは思いつきのままに歌い、遊び、胡麻塩頭の老人たちは、機嫌よくお互いの家をあちこち訪問し合ってる。花が咲くと春の季節が和らいだことを知り、木が紅葉を始めると冷たい秋が来たと分かる。時を記録する暦があるわけではないが、四季が自然と１年をなしている。心楽しく有り余る喜びがあるのだから、どうして知恵を煩わせることがあろうものか。

これが私たちのめざす桃源郷というものだろうと思います。この通りにできるとは決して思いません。でも、銀座のブティックを私の村に作ることはできます。でも、物は売れません。でも、これなら可能性があるんじゃないかと、よそにない物が、これに近いものが私たちの村にはある。ましてや、知恵を煩わせようものがあろうか。有り余る喜びがあるのだからと。そんな幸せな心をもつ人がたくさん住む村を目

指すというのも、私たちのこれからの新たな村づくりかなというふうに思っているところでございます。

これが先ほどのお城があった所とその周辺であります。まさに嫋やかな風景がこのようなものがございます。春にはこのように花も咲くというところであります。そんな地域、この小川という地域、71%が高齢者です。どうしようか。みんな小川を守りたいんです。みんな何もしなくて死を待つことはできないんです。じゃあ、みんなで何かしよう。先ほど言いました、桃源郷や作小屋をうまく組み合わせて新たな村づくりができるんじゃないか。そんなことに取り組みました。まず、基本コンセプトをしっかり決める。何らかの新たな山村モデルを作るというのが最終的な目的です。山村はどこも同じ秋の夕暮れという状況にあると思います。山村で人は増えるは、子どもはいっぱいいるが、バンバンということはほとんどない。みんな下り坂。じゃあ新たな地域づくりをしないことには残れないよね。今まで歩いた道は決して悪いとは言えません。でも、今の時代にやっぱり合ってるのという疑問に答えられない。もう少し知恵を絞ろうじゃないか。もう少し新たな生き方を求めようとみんなで考えることにいたしました。「平成の桃源郷小川作小屋村づくり」ということにいたしました。まあ、村外の皆様たちのいろんな意見、それからこっちの条件などいろんなものがあります。やっぱり働く場、それから交流で元気になりたい、生きがいを作りたい。最終的には小川に誇りをもって住み続けたい。一方では自然や人の触れ合いで癒しをしたい。交流をしたい。都会にとって原風景である作小屋が、自分のいわゆる心の故郷にしたいという方。それから、中には終の棲家として自分の余生を送ってみたいという方もいらっしゃるでしょう。ちょうど私は団塊の世代ですから、だいたい私たちがその時代になりました。長男坊はまだ所属があるんですが、次男坊、三男坊、四男坊になってきますとどこに住んでもいいという人がたくさんいるんだと思います。自分の好きなところに住みたい。みんなそうお考えで、もしかしたら元気な小川へお越しいただければ限界集落の脱却というのもできるかな、そんなチャレンジをしましょうということを決めました。

そして運営協議会を作りました。役員を決めました。「よーし、やるよ。みん頑張ろう」をしました。いろんな事業の展開をすることにしました。２年間で約 60 回の検討会・勉強会をしました。平均年齢が 70 歳以上の人たちが一年に 30 回ですよ。月に５回くらい集まるんです。月に５回くらい公民館に集まって、みんなでいろんなことをしました。結局、意識作りと組織作りで２年かかりました。長い月日をかけて取り組んだものは長生きすると昔から言われます。地域づくりもそうなんです。時間がかかったほど長持ちをすると言われる。私たちのところが長持ちするかは分かりませんが、時間をかけたのは事実でございます。そして、私たちにはやっぱりこれしかないんだということです。熊本県に行きました。ここは多良木町かな？水上村ですね。いろんなところにみんなと一緒に行って、まず見よう。まず自分で納得しよう。百聞は一見にしかずとほんとによく言ったと思います。一回見ることの方が百回聞くよりも本当に効果があるとつくづくそう思いました。遠いところも行きました。福島県福島市のすぐ側に花見山という４ha くらいのこんなところがあります。これは、植木屋さんが植えたんです。そして、花を切って、植木ばっかり植えられませんから、蕾やら花を売ってたんです。それが４ha くらいあるんです。東北地方は春がいっぺんに来ます。私たち南九州は最初に梅の花が咲きます。そしてあったかい所でレンゲや菜の花が少しずつ咲きます。そうしていると山桜が咲きます。桃の花が咲きます。ソメイヨシノが咲いてきます。藤の花が咲きますと

いう順番があるんですが、向こうはいっぺんにドンっと咲いちゃうんです。だからすごくきれいなんです。一人の方の家の後ろに植えたやつに40万から50万の人が見に来るようになったそうです。よし、それを見て来ようと言って、ここにも２回ほど地区の人に行ってもらいました。これは皆さん行かれたことがあると思いますが、白川郷ですね。昔からすごい白川郷。それからこれは鹿児島のあの天空の森「雅叙苑」。一泊21万円。お泊りになった方いらっしゃいます？残念でございますね。私も見ただけでございます。あのそういう雅叙苑。そんな物も見せていただきました。いろんな物を見せていただきながら自分たちのできることを探しました。地域の中に、昔からお豆腐屋さんがいました。まだ健在ですが、もうお豆腐は作ってません。地域のおばちゃんたちが自分たちで受け継ごうと作りました。試食を何回もしました。他の料理も試食を何回もしました。だから、たまたま私たちの村に来た人たちも連れてって、試食会にだいぶ入ってもらいました。そして、いろんな研究もみんなでやりました。専門家にも聞きました。茅刈もしました。今この茅がないんですよ。さっき言いました白川郷あたりはですね、東南アジアから葦を買ってるんです。だいたい遠野の千葉家という大きな藁屋根があるんですが、葺き替えに2,000万かかるといいます。それくらい茅が貴重なものになって、茅刈をする野原がないんですよ。だから至るところに行って、西都市の一部まで行って、みんなでボランティアで茅刈をしました。お年寄りは喜びました。今の若い人、縄をなうことはできません。私どもは形くらいです。縄をなうのに縄が必要だったら、お年寄りがもう我先に一生懸命してもらいました。出番があるとうれしいんだろうな、つくづくそう思いました。こんなことをして、この作小屋を作りました。マスコミの力もいただいて、こんな運営ができるようになりました。

先ほど研究した最終的なお料理はこれにしました。「小川四季御膳」。すべて小川でとれたものだけで賄う。４×４＝16（ししじゅうろく）個のお皿であります。これはですね、東京の多摩の方に三頭山総というのがありまして、そこでは20個のやつをやっていて、それをちょっとパクらせていただきました。ちょっとパクりまして、この料理も宮崎に杉の子という料亭がありまして、そこの森松平先生にお願いして、どういうふうに作ったらいいかということです。皆さんの所もそうだと思います。郷土料理がたくさんあると思います。郷土料理があって、タダで食べさせると喜んで食べます。でも、お金がとれますか？お金をとって郷土料理を出すというのは、やっぱりプロに磨いてもらわないと無理だと思います。私たちの浅知恵で、これはやっぱり木がいいですよね、山ん中だから。先生がダメ。どうしてですか？木はカビが生えちゃう。木は乾燥に時間がかかる。だから衛生的でない。言われたらそうだな。皆さんはこれを見る時どこを見ますか？これは蓋があるんです。真ん中の４つを見るそうです、まず。そして、こう見るそうです。こう見る人はあんまりいないと思います。言われてみればそうだな。やっぱプロだな。大きさにしても器の並べ方にしても、やっぱりプロの力をお借りしなきゃならない。まあそんなことでおばあちゃんたちがこんなふうにやっていただいております。

中秋の名月をかがり火、薪能みたいな中で神楽をするんです。すごくロマンティックです。「山菜祭り」もたくさんの人が喜んでいただきます。

そして結果、去年は2,000万くらいの売り上げです。地元に1,600万落ちました。100人の村です。ここに携わっている人がだいたい 30人くらい。割っていただければ一人あたりがどれくらいかお分かりいただけるだろうと思います。その他にも元気になった、喜びがある、美しく交流ができる。これも素晴らしいことだ

と思います。そして若者が、よそから西米良に来てくれました。結果、７％の高齢化率が５％減少しました。大変うれしいことであります。そして、おばちゃんたちが地域を美しくしようということで、いろんな人たちが自主的にいろんなことをしていただいております。福島県の花見山に行った方の中に、感激して帰ってきたら、すぐこの山を切って 7,000 本の植樹をしました。将来、これがもっと大きくなればもっときれいになると、そんな夢見て、みんなで慈しみ、育てております。発信されて多くの人に喜んでいただくと。それから、私たちは身の丈に合った取り組みを総参加でやると、やっぱりいろんな精神が、この地域、地域にあり、この精神をしっかり生かす。それから地域の人の想いだとか、速度だとか、それはしっかり守る。延びました。西米良ができる政策。私たち行政の最終的な目的は、私はこれだと思うんですよ。いろんなことを言いますが、大学を出なくても、専門勉強しなくても、中学卒業であっても、幸せに一生を送る人たちはたくさんいるんです。でも、一人一人が死ぬ時に、あー俺はいい一生を送ったなぁってのが一番じゃないかと。そのために行政は何かする。何をするのかということが私たちの仕事かな。最近そう思うようになりました。

その幸せ作りとして、今年 10 月に１班、２班、３班で「平成の江戸見物事業」を行いました。私が東京にいた時に、私の村のおばあちゃんと羽田で会いました。隣でいろんな話をしました。一緒に帰りました。その話をおばあちゃんがデイサービスに行って話したらし 25 く、そうしたら、それを聞いた隣のおばあちゃんが私の家内に、私定藏と言います。定ちゃんです。定ちゃんがいろんな話したらしいね。一緒に飛行機乗っただけで、ずいぶん安心だったと話されて、東京のスカイツリーの話とかされて、そのおばあちゃんが最後に「でもね、私はとうとう東京を見らんで逝くやろう。」と。ひざが悪くて、あんまり歩けない。私はもう東京を見ることはないだろうとおっしゃった。ピンときました。あっそうだ。この人たちは、あの先の大戦で大変ご苦労され、日本の復興のために我が身のことを考えずに、いろんな子育てから地域づくりのためにしてきた人たちなんです。その人たちは東京に行く機会がなかったんだろうと、そういうチャンスがなかったんだ。子どもたちが東京に修学旅行に行くんです。うちの村の小学生はディズニーランドへやるんです。じいちゃん、ばあちゃんも日本の中心、日本のシンボル東京。日本のシンボル富士山を裾野から見せてやりたいと思いました。戦後本当に多くのご老人、高齢者の皆さんのお陰で、私の村は今があります。本来ならば子どもが東京旅行くらい連れていけばと言われますが、なかなかそうもいかない。1,272 名のまさに運命共同体です。こんな小さな村ですから、じゃあ村が親孝行しましょう。親が皆さんの頃になかった修学旅行というのをやりましょうと言ってやりました。代金が 1,000 万ちょっといりました。行けない人がいますから、３割は自己負担。９社で入札しました。8 万 5,000 円くらいで、2 泊 3 日できます。残りは村が出します。そのお金は、皆さんが一生懸命育ててくれた村有林が 2,300ha もあります。間伐すればいいじゃないか。全伐すると文句言われますから、間伐にしました。そうすれば森林組合の労働の人も助かる。木もまた太る。そして間伐することによって、じいちゃん、ばあちゃんが東京に行けるに越したことはないだろうということで、そのようなことをいたしました。決して交付税は一銭も使っておりません。行きましたら、実は自分が３歳の時に、父は出兵して帰らぬ人になりました。そう言いながら、靖国で手を合わせて涙を流されてるおばあちゃんがいます。３人兄弟の２人の兄が戦争で帰らぬ人になって、「兄貴やっと靖国に来た」、そうして拝んでいらっしゃる方がいらっしゃいました。戦後、これほど

豊かになったけれども、なかなか靖国ですら拝むことができない人がいたんだなと、つくづくそう思いました。菊池一族がその昔箱根の山で足利軍と戦った時に、足利軍 3,000、菊池軍 1,000。まともに戦ったんじゃ決して勝ち目はないと言って、竹を切ってその先に短刀を刺して槍で大勝利をした。その記念碑、菊池千本槍の碑というのもございます。それ以降、戦いでは切り込みじゃなくて、一番槍、二番隊、三番隊、槍が行くようになった。まさに菊池の教えの先駆けを心の碑にしました。東京に、昔なら殿様ですが、今後継の方がいらっしゃいます。その方にもそこに来ていただきました。その夜は、殿様と飲み会もみんな一緒にしました。富士山も見ました。湖に逆さ富士も見ました。皇居も行きました。ラッキーなことに天皇陛下が２、３回前をお通りになった。そんなおじいちゃん、おばあちゃんは行く時には半分笑顔、半分心配。帰る時にはみんな笑顔。来た時よりも美しくという言葉がありますが、行く時よりも元気になってお帰りになりました。このことが、これからのそれぞれの家庭やそれぞれの皆さんの精神文化の高まりに、また健康に大きな影響をしてくれる。そう思います。中に一人、88 歳、今年の１月に米寿を迎えられたおじいちゃんがいました。そのおじいちゃんはこの 10 年間、ずっと一人でおばあちゃんの看護をしていました。介護をしていました。息子さん夫婦、その孫夫婦さんがおります。息子さんはもともと林業でしいたけを作っていました。その孫は役場の職員で優秀な彼が「30 になったら俺は村長、山師をする。」やめて山師。奥さん、子どもともども山師をしています。もう一人は、郵便局の職員でした。それもやめて、しいたけやら伐採やらしています。親子３人でしています。そのおじいちゃんが最初の第１班で行くことになっていたんです。そうしましたら、10 年間寝たきりのおばあちゃん、最近はずいぶん痴呆が進みました。おばあちゃんが 10 月の１日に亡くなってしまいました。おじいちゃんは大変楽しみにされていて、私は東京に行ったことねぇから行くわ、うん俺行く。と、おっしゃっていました。でも、その家庭で１週間ぐらいたってからですが、家族がみんな話したんでしょう。そこの奥さんがおじいちゃんを諭しました。おじいちゃん、東京に行っておいでよ。この 10 年間、おじいちゃんが本当に一生懸命介抱してくれたから、私たちは仕事ができたし、生活ができたんです。もし、おじいちゃんの体が悪かったら、私たちはこんな生活はありません。亡くなったばあちゃんも、おそらくばあちゃんが亡くなったことで、おじいちゃんが楽しみな旅行を行かないのは、本当に残念だと思うと思うよ。だから、私たちみんな行って欲しい。だからおじいちゃん、東京に行ってよ。そう諭して、東京に送り出してくれました。おじいちゃんは帰ってきて開口一番、宮崎空港で会いましたが、よかったー、行って良かった。ばばも連れて行った。ばあちゃんも連れて行ったって言って喜んで帰っていらっしゃいました。じいちゃんが喜んだこともうれしいんですが、その家族の優しさが、家族の愛が絆がまた一段と深まったことに大変私はうれしいものを感じました。こんな家庭に決して暴力も非行も、決してないと思います。やっぱりみんながお互いに助け合い、そしてお互いに認め合うことが大切じゃないかとそのように思います。

おわりに

地の利、人の輪に如かずといいます。私たちの村のところは地の利に恵まれません。でも、人の輪には如かずと言いますから、やっぱり人が心と心をつなぐことをベースに村づくりをしました。私たちの最大の宝は人であります。最大の武器も人であります。ですから、これから最大の力をみんなで発揮しながら村づくりに努めたいと思います。新しい明日は必ずやっ

てまいります。明日に夢をかけ、幸せ度の高い村づくりにこれからもみんなで挑戦しようと思っております。ご清聴誠にありがとうございました。